

## 巻 頭 言

# 学究生活のほとりに立って – 昭和・平成・令和を歩んで –

大分大学 金澤 誠司<sup>1</sup>

教員としての最後の年に本誌巻頭言を執筆する機会を賜ったことを、大きな光栄と感じている。一つの節目に立ち、昭和・平成・令和という三つの時代に跨った学究生活を静かに振り返ってみたい。

昭和の時代に生を受けた、いわゆる X 世代の私にとって、大学定員の臨時増のなか教官ポストを得たことは、まさに幸運であったと言わざるを得ない。ふと、いま自分はどこに立っているのだろうと思う。長く歩いてきたつもりでいたが、振り返れば道は意外に短く、前を見ればまだ続いている。ここでは、時代の流れのなかで経験したことを率直に綴れば、そこに何らかの意味を見いだせるのではないかと思っている。

いわゆるマークシート方式の受験を経験し、数々の大学改革を現場で見てきた。時にはその当事者として、物事に関わる経験もした。昭和の終わりに世に出した最初の論文は日本語であった。指導教官と机を挟み、赤字の入った原稿を何度も書き直した。図は手で描き、原稿は紙の匂いをまとっていた。研究とは、目に見えるかたちを持った営みであった。論文執筆は、常に走り続けることを求められる営みでもあった。止まれば倒れる。成果が滞れば、研究環境もまた揺らぐ。それでも研究は脈々と続けていかなければならない。

平成に入り、自らの責任で論文を書くようになった。英文誌に挑戦しながらも、肝心な英文にはまったく自信がなく、定型句を頼りに、まるで既製の枠に言葉を流し込むようにして原稿を整えた日々が懐かしい。査読者からの厳しい指摘に心が揺れることもあった。しかし、そのやり取りの中で、研究とは独白ではなく対話であることを学んだ。譲るべきところを譲り、守るべきところを守る。その静かな応酬の積み重ねが、論文を形づくっていった。

令和になると、生成 AI が現れた。文章を整え、構成を示唆し、過去の知を瞬時に束ねる存在が、研究の傍らに立つようになった。研究の全過程に AI が関与し得る時代である。その便利さに驚嘆しながらも、私は時折立ち止まる。問いを立てるのは誰か。責任を負うのは誰か。創造とは何か。人と機械の境界が揺らぐなかで、研究者という存在の意味を改めて考えざるを得ない。さらに、研究者倫理や法制度が生成 AI の発展に十分追いついていないことも気がかりである。人間社会、そして研究活動との共存のあり方を、これから考えていく必要があるだろう。

学会で出会った研究者たちは、私を遠く高みへと連れて行ってくれた。国内にとどまらず、海を越え、異なる言語と文化のもとで研究を語り合った。外国人研究者と初めて向き合ったとき、そこに育った環境や文化の差異を強く意識した。しかし、やがて気づいた。研究に悩み、実験結果に一喜一憂し、締切に追われる姿は、顔立ちや言葉が違っていても同じであるということに。そして研究者という存在は、どこか共通の孤独と不安、そしてそれを払拭しようとする情熱を抱えていることがわかった。多くの素晴らしい研究者との邂逅が、研究者人生を豊かなものにしてくれた。

静電気・放電・プラズマという研究テーマに出会えたことも、振り返れば偶然であった。偶然は、時に人生を決定づける。私たちは自ら選択しているようでいて、実のところ多くの他力の流れの中に身を置いている。恩師、同僚、学生、共同研究者、そして家族、無数の支えがあってこそ、今日まで歩むことができた。

米国ボストンで開催された 2005 MRS Fall Meeting に参加した折、雪降る中にジョン・F・ケネディ大統領図書館・博物館を訪れた。そこで目にした言葉が、いまでも心に残っている。

“A man may die, nations may rise and fall, but an idea lives on.” – John F. Kennedy

人は死に、国家は興亡を繰り返す。しかし、理念は生き続ける。研究者が論文を書くのは、単に業績を積むためではない。そこに込められた何らかのアイデアが、いつの日か誰かの思索を刺激し、別の研究へと芽吹くことを願うからである。もし自らの仕事の中に、そのように生き続けるアイデアがひとつでも宿っているなら、それは望外の喜びである。

学究生活のほとりに立ち、振り返れば、多くは小さな出来事であった。しかし、その小さな積み重ねの中にこそ、研究者として生きた時間がある。本学会が、これからも新たなアイデアを生み出し、創造性あるパラダイムへと育て、それを未来へと手渡す場であり続けることを願いながら、筆を置きたい。

<sup>1</sup> skana@oita-u.ac.jp